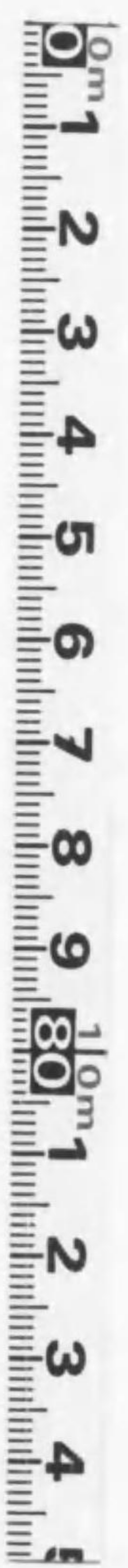


特277
965

特277-965
76W10906



始



八陣守護城

目次

政清本城の段……………一六六

同 註釋……………一七二

○ 八陣守護城筋書……………一〇〇

押 繪

政清本城の場(口繪)



まはらぢんちゆうのゐんせう
 八陣守護城





76W10906



稽古説附 義太夫名曲全集

八陣守護城

政清本城段



行先は二重に建てし思惟の間人の出入はとゞむれど秋を告
る風のごゑにはの本草におとづれてすだくむしさへ物凄き
我本城へ我ながら心置く露踏分て窺ひ來たる主計之助隔の

垣に身を寄て、母のをしへの綱手繩引ばすゝむしそれぞとは、
豫て松蟲雜絹が、手燭携へ庭におり、母様お越遊ばしたか、イザ
こなたへとゆふしでの神の結ぶの縁ぞとは、思ひがけなき主
計之助のふなつかしやと雜絹が、切戸押明け走り寄夢ではな
いかと嬉しさの跡は詞も泣斗。

『ヤレ音高しく、密にく、先何よりは父の身の上、餘人を遠
ざけお身一人おそば仕へ有と聞物いみなりとは心得ず、コレ
コレ様子聞いて下され』

と、すかしなだめて尋れど、こなたは猶もすり寄て、『ア、コレ
申久しぶりで逢た私無事であつたかかはらぬかと、たつた一

言おつしやつても、不孝のとがにもよも成るまい、其お心とは
露しらず、都でお別れ申てより、勿體ない事ながら、と、様や母
さまを思ふ案じは何處へやら、あなたの事が苦に成て、ほんに
寝た間もわすれ兼逢たい見たいとあけくれに、こがれしたふ
て居る物を聞へませぬと娘氣に、跡や先なるうらみ言、

『ホ、尤ながらそれは内證、今日國へ歸りしは、我のみならず
母御も同船、湊口より魁せしは父の安否を尋ねん爲、コレ御病
氣に相違有まいがの』

『アイ別間の様子は母様はじめ誰にもいふなと口留なれど、
さうおつしやればお食も少し折々手はこの草の根を出して

おあがりなさるゝ斗り亥の刻よりは樓にて御祈念有るも只
お一人』

『ム、それにこそ仔細ぞあらんは、上お聞なされたか』

『委細はこれで聞きました』と思ひがけなき切戸のかけ出る
葉末を見て恟り様子あかせし案じ顔母は娘を押しつめ別間
に向ひ手をつかへ、

『都の御所より上使として主計之助參上』

と、取次く母の詞より外にこたへもなき折ふし、あやしや庭
の草隠れ、あらはれ出たるあまたの鼠、コハいぶかしと三人が、
すかしながむる間もなく透をつたひて樓閣へ、連々として入

るよと見へしが、俄に人聲烈しき物音、スハ一大事とかけよる
障子、蹶はなす別間は、ともし火も消てわからぬ眞くらが、數
輩を相手政清があるひは、捻首手あしをもぎ、あたるを幸ひ人
つぶて、投出す庭先主計之助得たりと仕留る早足の働き、後に
ひかへしまり川玄蕃政清やらぬとしつかと組む、ふりほどい
てがんづかつかみ、膝に引敷大音上げ、

『ヤア鼠と變じ我居間へ問者を入しは、時政の家來しのびに
名を得し鞠川よな首引拔は安けれど、助けかへすは都へ使わ
が存命を物がたれ』

と、宙ににぎつて、エイやつと投越すからだは堀のそと、ねず

みと成て逃さりけり。主計之助は父の聲聞く嬉しさにさし
寄て、

『時政公より父への使何にもせよあかしを照し、御教書御披
見下され』と縁側に直し置。開きもやらす高笑ひ、

「ハ、ハ、ハ、ハ、此書面取るに及ばず、日本無双の政清を、味方
に付んなんど、はあざとき計略、ヤイ丁兒め、おのれ生年十七
歳、忠孝信義のぜひをも分たず、大切なる幼君の守護に残せし
かひもなく、時政の甘き詞にたらされ、おめく」と歸つてうせ
たは女に迷ふ大馬鹿者御教書など、は穢らはしと、引きき庭
へ投捨てたり。主計ははつと赤面の詞なければ母が引取、

『ソリヤ餘りお氣づよい、何ぼうお氣に叶はいても助けられ
たる恩は恩、あの子の難義になる事を思ひ返して給はれと、母
の願ひも慈悲なりし。思案を極め主計之助座を立上つて實
誠親子兄弟銓楯となるも戦國の常、武士のならひ、母上御無事
とかけ出すを、

『ア、コレく其一言が敵味方侍の義と言ひながら、母が悲し
さ此子が思ひ跡の歎きを推量して、マアくまつてたもいの』
と、母が諫に難絹も、たとへお返事遅く共、父上都にましませば、
お首尾悪ふはなされまい、頓て母様お越しまで待て給はれ待
ていのふ。『コレく申身御様、親子夫婦の生別れ不便と思し

只一言、お留なされて下さりませ、お慈悲〜と手を合せ拜む
 内にも戀人にはなれがたなき女氣は哀にもまたいらしき。
 『ホヲ、娘が願ひ去事ながら、執成すべき三左衛門はとくに
 落命いたしつらん、が女の縁に主計之助、其身を立る心なるや』
 『アイヤ父上の御意共存せず、三左衛門殿死去有る事御存じ
 有ば猶もつて、御身の上氣づかはしく立歸りしは變有る時、此
 本城を守らん爲』

『ハ、、、何さ〜、譬へいかなる變有る共、六十餘州と釣
 がへの政清が此本城、いつかな〜人手に渡さぬ、此身此ま、
 樓にて四海を守護する我が精神、跡構はずと幼君へ忠義を立

る心を見せよ、親子の對面是限り』と、烈しき詞諸共に、はつた
 と立切る障子の内、

『ハア其御賢慮を聞く上は、所存を立て御目にかけて、此一通
 は雛絹殿跡にて披見致されよ、母上様おさらば』と言捨てこ
 そかけり行く。ノフコレ待てと雛絹が夫をしたふ娘氣によ
 べど詮方泣倒れ、伏沈みたる斗なり。泣聲聞て母柵、こかけを
 立出で傍に寄り、

『ノウ雛絹、何ぼうこがれしたふても、主計殿には添れぬわい
 のふ』

『ヤアかゝ様か、そりやまたなせでござります』

「オ、驚きは尤じやが、コレ夫の最期もお主の業恨むにかひなき家來の我々、縁を切ねば主計殿は、時政公に助けられし恩に命を捨てねばならぬ、コレ引別るゝも操じやと諦めてたもいのふ證據は残せしソレ其文」と、忍びのともしび差寄すれば、涙ながらに押しひらき、

「ナニ〜父の仇たる時政の忠臣森氏の娘なれば、所詮添れぬ敵同士、縁切る上は一旦の恩も情も是限、ハアはつと斗に讀さして、正體涙にくれけるが、覺悟極めて懐刀咽喉にがばと突立れば、はつと驚く母と母、ヤレ早まつた何事と抱起して介抱に娘は苦しき顔を上げ、

「ノウ早まつたとは愚の仰、主計様に添れずば斯成行くは身の覺悟、ア、思へばはかない私が身の上、父の最期といふ事も、今聞く迄は夢にもしらず、御無事でござると思ひ詰、仇にくらした不孝者、其罪科が報ひきて、二世をちかひし戀中も、けふを限りと成果しを、可愛い事じやと思し召、未來は女夫にならるゝやう、とりなし頼み上げますと、今死る身の際迄も、輪廻に迷ふ心根を思ひやりつゝ、二人の母、いぢらしいやら可愛いやら、胸一ばいにせき上げて、とかうの詞泣倒れ、心も亂るゝ斗也。

「ホ、雛絹が最期の願ひ、加藤主計之助清郷、是にて承知いたせしと、ひらく闇には父政清、以前にかはる六具の出立、妙法蓮

華の七字の旗、主計が俗名書添えて、弓手に押立て坐したる姿、
武威三軍に鳴ひ々き、唐國迄も今の世に、おち恐るゝも理りな
り。妻は見るよりヤアくく『我子の佛果を其旗に、お書有し
は死るのを御存じ有てか何故』

と問もうろく、柵親子俱に様子を氣遣へり。

『オ、時政の恩を請けまじと、我強くいひしは都にて命を捨
てよとをしへる謎、親が胸中よく知て、歸國以前に雛絹へ、離縁
の状を認めしは、女に心引されず、忠義に死る忤が潔白ハ、ア
健氣にも出かしたり、それに連添ふ身程有り、娘が貞女も育て
がら我子へ立る心の操、ホ、適なり雛絹敵と成り味方と成る

も此世の業、せめて未來は佛果の縁結んでくれんと此旗に、二
人が俗名書付しは親がゆるせし夫婦のかため、コリヤ寂光淨
土に生を受け、妻よ夫と睦まじう、誰憚らず添とげよ、南無妙法』
と閉る目に不便の涙はらくく、唱ふる經も口の内、手負の
耳に通じけん、

『エ、有難うござります、其お赦しを聞まして嬉しう成佛い
たします、主計様にも覺悟とは悲しい中にも私が樂しみ、あ
の世の道で待合せ、一ツ所に参ります、二人の母様舅御様、御息
もじで』と斗にて、娑婆の名残はにつこりと、笑うて息は絶え
にけり。ハア悲しやと柵葉末死骸に取付き抱きしめ、身も世

もあらぬ悔み言、

「生れて此かた二親の手もと放れぬ此娘、よく／＼思ひしたへばこそ百里二百里此國へ、勇みすゝんで只一人來た心根がいちらしい、夫婦となつた其日から國と都へ引わかれ、死る今迄一夜さも添ぶしもせぬ薄い縁、むすんだ神も恨めしい、それ斗かは夫にもおくれ、残る一人のいとし子の自害するのを見よう、迎はる／＼來たは何事と、かひ亡骸を右左おしや可愛の數々を露置く葉末柵も、かぞへ立て／＼涙々は漲りて、満くる汐の荒岬、浪打寄る如くなり。歎きの中へ灘右衛門、息を切らしてかけ戻り、

「コレ旦那殿、こかけに忍んで様子を聞き、息子殿を助けふと追かけた一里の松原長持へ入かけ出す所、南無三寶とはしり付、組んづころんづして見たが、多勢に無勢雲霞あとに残つた此状箱、上書は加藤氏へ湖水の何某、お前は知てござりますか」と差出す、様子を聞いて政清は、物をも言はず封押切り、
「八十川の其源はかはる共、心近江のすへをみづうみ。フウ、ハレ心よき秀句じやよな」と吟ずるこなたに聲高く、
「ホ、ウ其歌の心は大内義弘、とくより是にて承知せり、政清殿に對面せん」と、明智の大將物かげより欣然として出給ひ、携へ持たる藁づとの中なる劔取出し、

『焼刃にあらはす足下の本心、よく見られよ』と差出せば、仔細有んと頂戴有とつくと詠めて拔放せば、俄に一天照りかゝやき、北斗に映ずる劔の光、赫々たる其有さま、政清はつと押いたゞき、

『これぞ北辰尊星より授くる所の七星丸、それがし年来守護せし名劔、幼君の御味方に成べき勇士を撰出し、劔を渡し下されよと、片岡殿へ頼み置しかひ有て、今日只今劔を證據にきたられしはそれなる船頭、誠は備前の住人、兒島元兵衛政次殿、今日只今幼君の味方に屬する割符の一腰、慥に落手仕る』と劔を鞘に納むれば、詞異義なく、兒島元兵衛真中にどつかと座し、

『ホ、ヲ適れ眼力政清殿、片岡氏に盟約せし我本名を藁苞に、包かくせし劔の割符、兒島元兵衛政次なり。某味方に屬する上は先君恩顧の諸侯をかたらひ、ヌハ合戦の時きたらば、近江路に根城をかまへ、美濃信濃路へ出張して、時政が多勢を切所にさゝへ、追詰めく、泡吹せ、狸親仁が白髪首、引きげんは瞬く内、我方寸の胸にあり』と勇みすゝみし勢ひは、軍師とこそはしられけれ。義弘につこと打笑ひ、

『ホ、、、、こはおこがましき兒島が廣言、國威たる北條に双向ふ心底聞捨ならず、併小田家より恩義を請し事なれば、只何事も餘所に見ん、今の一首に八十川や其源とあらはして、

主計之助を助けしは、近江源氏に隠れなき佐々木左衛門高綱
 ならん、二人の軍師揃ふ上は、最早安堵の加藤氏、我も察祝仕る』
 と始終をはかる名將の詞は、鐵石うしろ楯げに大國の主なり。
 政清きつと空打ながめ、

『アレ〜〜〜光りをうしなふ將星の今まで地下に落ちざる
 は、北辰尊星感應有り、百日の満願に佐々木兒島の兩大將味方
 にくはへし、今月今日、アラ悦ばしや嬉しやと、いふ息ざしも心
 のたるみ、忽ちかはる其面色、見るに葉末がまた悔り、扱は噂に
 違ひなき、お身の惱か悲しやと、すがり歎けば、『ヤアおるか〜
 時政がたくみはしりながら、いなまば違勅におとさん方便、元

より命は天にあり、とはいひながらお通のかた、斯なる果は御
 存じなく、歸國のみぎり幼君をわれにいたかせくれ〜もお
 たのみありし其時は、勿體なしともいたはしとも、百萬軍の強
 敵を掴みひしぎし、政清が五體をつらぬき肉をさくよりつら
 かりし、其心を休めんと百日の今日まで胸をくるしめ身をく
 るしめ祈り〜し、甲斐有て、念願と〜きしわが身體此樓にと
 ヲむべし。三左衛門のらく命も、時節とあきらめしがらみ殿、
 葉末も俱にさまをかへ、都のせがれが先途を見よ。さるにて
 も嫁難絹、さぞやせがれを待わびて、くさ葉のかけを行なやみ、
 まよはんことの不便やと、百連の明鏡をてらすかごとき、兩が

んに血汐ちしほをそゝぐばかりなり。歎なげきをとゞめ兒島元兵衛二〇

『此このうへは葉末殿はまのどのしがらみ殿どの此政次このまさつとがつき添まて子息しよの安否やすを尋たづねし上うへ佐々木ささきにてうじて治國ちこくの計策けいさく日本にほんはおるか唐高からかうらいらいい双ふた向むかふ奴やつばらみなごろしし幼君ちやうくん四海よっかい太平たいへいを其樓そのたかどのに安座やすして見けんぶつあれよ加藤殿かとうどのとつゝ立たあがれば大内義弘おほうちぎひろ

『ホ、ヲいさましゝ兒島政次こじままさつとしかし天てんうんいたらずば幼君ちやうくんの御供ごこうして我本國わがほんこくへ來きたられよと殘のこす詞ことばは義弘よしひろが妻つまと妻つまへも末々まゝをいさめて直ただに歸國きこくの船路ふねぢ女心おんなこころの二人連ふたりづれこなたも法はふの蓮葉はすはに至いたらせたまへ南無妙法蓮華經なんぶみょうほふれんげきやうくくくと唱となふる功德くつとくは先まの世よに頼たのめてぞめぐり愛別離あいべつり苦くる會あ者しや定離ぢやうりとは聞きながらか

へらぬ事を繰くりかへしおさらばさらばの聲こゑばかり跡あとに名なこり
は升ますがたを出いる本城ほんじやう帶曲輪おびまがら注連しゆめを引ひはへし樓たかどのに端座たんざ合掌がうぢやう古こ
今の英雄いゆう見み上ある空そらに星象光せいしやうかうてらす威かとくぞありがたき。



政清本城の段註釋

〔思惟の間〕 思惟とは靜かに物を考へること。「思惟の間」とは端坐して祈念を凝してゐる部屋といふやうな意味の言葉で、茶ノ間とか書齋とかいふ定つた物ではない。

〔引けばすゝむし〕 それぞとは豫て松蟲……といふ次の句に縁を繋いで鈴蟲と洒落れた詞で「鈴を引けば」といふことである。鈴の附いてゐる紐を引ッ張ると奥から取次の者が出て來る恰好今のベルを押すやうなものである。こゝでは松蟲といふ蟲の名に「待つ」といふ詞が懸け合せてある。

〔ゆふして〕 玉串、注連などに懸ける木綿、神の枕詞。「いざこなたへと——の」といふ本文の句は云ふといふ意味を懸け合してある。

〔切戸〕 一方しかない扉。四目垣などある庭の小門に用ひる。

〔御教書〕 みげうしよ。院より賜はる下し文のこと。關白または將軍よりの下し文をも御教書とすよ。

〔あざとき〕 ——計略。あさはかなこと。

〔六具の出立〕 甲冑を着けたこと。六具とは鎧、太刀、采配、鞭、團扇、扇、以上六つを大將の六具とすよ。

〔寂光淨土〕 佛陀の智識より見たる世界の名。

〔御息もじ〕 あん息災の意味。もじは接尾詞で、昔の婦人の使つた詞。おはもじ(恥かしい)お氣もじ(氣の毒)お餅もじ(餅)など語の下の音を略して用ふ。

〔北辰尊星〕 北極星。

〔國威〕 皇室の外威。

〔察祝〕 さぞお喜びであらふと云つて祝ふこと。

〔將星〕 天にありて大將の象ある星。大將の歿することを將星隕つといふ。

〔息ざし〕 息づかひ。

〔法の蓮葉〕 のりのはちすば。妙法蓮華經の功德によつて淨土に生れるといふ事。

〔愛別離苦〕 愛する人と生別れ又は死別れをする悲み。佛法にていふ八苦の一の生苦、老苦、

病苦、死苦。これを四苦と云ふ。愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦の四つを合せて

八苦といふ。

〔會者定離〕 天地の間にある物は總て因縁によつて結び付いてゐるのであるから、もし縁が切

れれば直ぐに離れてしまふのである。親、同胞、夫婦、主従の間柄も其の通りで、離れる時

が來れば否でも應でも別れなければ成らないのである。

〔升がた〕 城廓の一の門と二の門との間の四角に取廻した場所。形が升に似てゐるから升形と

いふ。

〔星象光〕 北斗の星の光り。古今の名將たる政清が今や息を引取らふといふ時に當り、將星地に隕ちんとして光を放つてゐる。

作中の人物と本名

- 北條 時政——徳川 家康
- お通 の方——淀 君
- 幼 君——秀 頼
- 佐々木 高綱——眞田 幸村
- 森三左衛門——池田三左衛門
- 加藤 政清——加藤 清正
- 加藤主計之助——加藤 忠廣
- 大内 義弘——島津 義弘
- 兒嶋又兵衛——後藤又兵衛

政清本城の段註釋終

稽古本附義太夫名曲全集

八陣守護城

解説題

この浮瑠璃は關東方の目の上の瘤であつた豊臣家の加藤清正を毒殺した事を骨子として書いたものである。八陣は支那の戦法の一つ、守護は幼君秀頼を守護する事と肥後の音便を取つて名題としたものである。作者は中村魚眼、佐川藤太の二人である。魚眼は大坂難波新地中村屋といふ茶屋の主人である。佐川藤太は何ういふ人であつたか能く分つてゐない。

この浮瑠璃は文化四年九月の作で、芝居に出たのは文化七年正月江戸森田座が初めてである。政清本城の段は其の八冊目の切である。

八陣守護城

八陣の芝居を見る人は誰しも疑ひを抱くことです、何ういふ譯で政清は自分の城の天主に閉籠つてゐるか。

都から歸つて來た政清は直ぐに天主閣へ入つて誰にも逢ひませんでした。側に附いてゐるのは子息清郷の嫁雛絹一人でした。雛絹は北條時政の家來森三左衛門の娘で、双方の親から許された女夫仲であります、ほんの式を済ませたと云ふだけで、別れ／＼に成つて居りますが、かうして男に事へてゐる間にも、戀しい夫のことは忘れる暇も有りませんでした。

雛絹は朝夕男に附添つて居りながら、その心持もその容態も判然分らないのであります。世間では病氣で引籠つてゐるやうに噂をしてゐるが、實際、食事も碌に進まない所を見ると或は病氣なのかも知れないが、それならば醫者に掛るとか薬を呑むとか何とか爲さうなものです、一切無言ですから何が何だかさつぱり判りません。時折手箱の中から草を摘み出しては舐めて居りますから、大方藥草でも召上つてゐることと思つて、獨りて胸を痛めて居りました。

政清は毒を呑んで、それが爲め壽命も早や盡きようとして居るのであります。然し今こゝで自分が死んでは主人の家は滅てしまひますから、天主閣に籠つて立願をしてゐるのであります。然ういふ譯ですから食も碌に取りません、時々草の根を舐ぶつては毒を消して居ります。元より日本無双の豪傑ですから傍で見た所では何うも死毒に中つた人とは思はれません。

一體何ういふ理由で毒を呑まされたのであるかと申しますに、己れ一人で天下の政を手に握らふとしてゐる奴があるのです、それは外でもない北條時政その人です。然し政清が居つては其の志を遂げる事が出来ませんから、何うにかして亡き者にしようと思ひましたけれど、腕力では兎ても敵ひませんから、これは先づ毒を盛るに越した事はないと思ひましたが、浮かと其手に乗るやうな政清では有りません。仕方がないから森三左衛門に苦衷を打明けて毒味を致させました。三左衛門は内心當惑いたしましたけれど、主人の言付ですから止むを得ません、「惜しい人を殺すのか」と思つて心では泣いてゐました。朝廷より賜はつたと云ふことで毒饅

頭を進めまして何気なく風味を致しました。政清は早くも時政の悪計を看破りましたが、これを拒めば勅命に背くと云ふことになるし、また一つには三左衛門の忠義に感じまして、然り氣なく頂戴致しました。

死毒を服しては耐りません、三左衛門は間もなく落命いたしましたから、如何に鬼神と云はれた政清でも追付け冥途へ行くであらふと思つてゐた處、これは不思議、顔色一つ變りませんで、幼君にもお暇乞を申上げ、静かに淀川を下つて、大阪から船出をして本國肥後へ引上げました。政清は吾が命運の早や盡きなんとしてゐるのを知つて居りますから、主家の事を種々と考へまして、自分に代る程の人物を見立て、それに後事を托することにしました。當時、日本武双の名將たる佐々木四郎左衛門高綱こそ主家を托するに足る大物でございますから、前々より其れとなく橋渡しを爲て置いたので、高綱はまた自分の外に一人の英傑を選んで、これを推薦する事になりました。それは何者でせうか、嗚呼舞臺へ出て來ますから、もう少しお待ち

下ろす。

こゝに政清の伴主計之助清郷は父政清が重態であるといふ風聞を聴きまして、母親と一緒に本國へ立歸りましたが、政清は頑として面會を許しません。雛絹は思ひがけない事で夫の歸つたのを喜びましたが、清郷は大事を抱へて居りますから碌に愛想も言ひませんので、雛絹はその無情を怨んで居りました。

其時不思議なことには、何處からとも無く鼠が幾匹も／＼出て來まして、欄間を傳つて柱の隙間から中へ入つて行つたと思ふと、やがて消魂しい物音がしたので、清郷は押取り刀で駆上らんとすると、高樓から人間がバラ／＼と降つて來ました。何れも黒装束で身を包んだ忍びの侍であつたが、首が捻れてゐたり、足が折れてゐたり一匹も満足な奴はありません。此奴らは政清の寢首を搔きに來たものでせう。中に鞠川玄蕃といふのは忍びの名人でしたが、まんまと失策つた上に首根つ子を引つ掴まれて、濠の外へ投げ飛されました。ブーンと風を切つて地へ

たへグシャリ。イヤ驚いたの驚かないのツて、何ぼ名人だつて是ぢやあ耐りません、ギヤツと云つて息が止つたかと思ひの外、そこは名人だけに何處を何う助かつたものか、元の鼠になつて消え失せました。

主計ノ助は父の無事な顔を見て飛立つ程嬉しく思ひましたが、政清は大いに腹を立てまして、お前は何の用が有つて歸つて来た、時政の甘言に乗つて此の父を欺しに来たのか、それとも女に心を惹かされてをめぐりと立歸つたのか、何故主家のために生命を捨てないのかと云つて恥しめましたから、清郷は一言もありません、雛絹には去り状を渡して暇乞もそこ／＼にして、其場から直ぐ都へ上りました。

雛絹の生の母柵が尋ねてまゐりまして、三左衛門の横死の事を話しました。雛絹は始めて事情が分りました。兎ても添送げられないものと諦めまして、自害を致しました。二人の母親は右と左から取籠つて泣き悲みます。政清は清郷に代つて未永く夫婦になれ、未來で添送げよと

大音に呼はりましたので、雛絹は喜んで目を瞑りました。

只見る、政清は甲冑に身を固め、お題目の旗を押立て、儼然として床几に掛つて居るのでした。その旗の左右に清郷の名前と雛絹の名前とが書付けてあります。母親と母親とは今更のやうに涙を覺えました。

此日偶然にも大内義弘と見島元兵衛とが落合ひました。元兵衛こそは前に云つた通り佐々木高綱が選んでよこした萬夫不當の豪傑であります。態と身を憔悴して船頭の姿になり、名前も濊右衛門と名告つて、佐々木から預けられた七星丸といふ寶劍を持つて、それを印にのそつと遣つて来たのであります。かうして二人の大將を得ましたから最早安心して目を瞑ることが出来ます。實は此の二人を得たために天主閣に籠つて祈念を凝してゐたのであります。

政清の命数は此日を以て盡るのであります。北方の天にきら／＼と輝いてゐた將星は此の一世の英傑を迎ふるもの、如く、更に明るく更に強く光を放つて居ります。見る／＼政清の面色

が變つて來ました。

惜しむべし天下の大勇も茲に世を去つたのであります。

佐々木程の軍師が居り、兒島元兵衛程の大將が居つても、さて運の拙いといふ事は仕方のないもので、戦ひ利あらず、清郷等は倒れ、幼君は西へ落ちて、大内義弘の許に匿まはれる事になりました。

○

この淨瑠璃は何方も御承知の通り大阪方と關東方との紛糾を仕組んだもので、その北第時政といふのは申すまでもない徳川家康のことです。佐藤政清とは加藤清正のことです。清正は當時大阪方第一の老臣で、人望から云つても武力から云つても關東方に取つては一番邪魔になる人ですから、或は毒殺されたのでは無いかといふ説も有つたのですが、實は病死をしたのであ

ります。此人が若し生きてゐたら、大阪の役は或は起らなかつたかも知れません。もし關東方から事を起せば、當時尙ほ豊太閤の恩になつた人が深山居りますから、必ず大阪方に味方をするに違ひありません。併し清正の外にはそれらの人々を纏めるだけの器量人が無かつたので有りません。

子息忠廣といふ人は、この淨瑠璃では清郷となつてゐますが、所謂不肖の子で、兎ても親の志を繼ぐことは出来ませんでした。到頭關東方のワナに係つて家を潰して了ひました。

真田幸村、後藤又兵衛いづれも當時浪人組の雄で、第一流の大物でありましたが、何しろ大阪には其の心棒になる人が無かつた爲に、てんやわんやで、折角の智慧袋も持腐れになつて、まんまと勝つべき軍を負けにして了ひました。もし此人達の意見が用ひられたら關東方は失敗したかも知れません。

秀頼は大阪の城が落ちた時に母淀君と一緒に死んだのであるが、實は薩摩へ落ちて島津に養

331

161

はれてゐたのだと云ふ説もあつて、眞偽はよく分りませんが、矢張戦死したのが事實だらふと思ひます。島津は關ヶ原の役にも大阪方に附いた位で、秀頼に同情するのは寧ろ當然である、勢ひ然うした想像説も起るのでありませう。それに島津の領分は九州の南の端にあつて、何處から手に入らないやうな位置を占めて居りますから、いろ／＼と想像され易いのであります。

(をばり)

昭和五年七月十日印刷
昭和五年七月十五日發行

解説
八陣守護城

不許	複製
----	----

編者 玉井清文堂編輯部

東京市神田區表神保町十番地

發行兼印刷者 玉井清五郎

發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話神田二二三三番
振替東京三二一八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

